

2018年度しあわせ研究

子育てにおける幸せ観を考える

研究員 義永睦子  
榎田二三子、生井亮司



本研究は、子育て中の保護者を対象に行う哲学対話(哲学カフェ)が子育てに対する意識や子育てに対する幸せ感に変化が生じるかを研究するもので、継続研究2年目である(しあわせ研究所通信 Vol.9 参照)。

哲学対話は「子どものための哲学」を中心に1970年代にMatthew Lipmanらによって始まった。日本では2000年ころから、主に小学生を対象にしながら広まり、現在では大人のための哲学対話(哲学カフェ)が広まりつつある。

哲学対話は「大人とは?」や「普通とは?」あるいは「学校とは何か?」などといったどれもがもっている「素朴な問い」から始めることができる。「素朴な問い」は参加者の日常的な経験をもとに対話を重ねることにより根本的で哲学的な問いへと深まる。<sup>1)</sup>

子育て哲学カフェは、子どもと保護者、家庭という限られた関係性に閉ざされがちな子育て期にある大人が、日常生活から離れ、数時間でも哲学対話を行うことで、子育てや人の生き方の本質的な意味に気づく機会になるのではないかと考えた。

開催は月1回(約1時間半)、武蔵野キャンパス内の造形教室にて行われた。この2年間の開催時期および参加者数は以下の通り。2017年9月~2018年1月計5回(参加者数:延べ52名)。2018年5月~2019年1月計8回(参加者数:延べ65名)。参加者は、子育て中の保護者(30歳代から60歳代。職業も専業主婦から共働きと多様)。

哲学カフェでは、毎回参加者でテーマ(素朴な問い)を決め対話を重ねていく。

<2018年テーマ一覧>

5月「普通とは」、6月「みんな一緒とは」、7月「寄り添うとは」、9月「嘘をつくこと」、10月「人生はおもしろいのか」、11月「本音と建て前」、12月「学校で勉強すること」、1月「弱さとは」。

哲学対話のプロセスをたどると、個人的体験の内容が、多様さから主体や客体の転換、行為から在り方そして存在や非存在、関係性、時間的展望、両義性へと深まっている様子が認められる。参加者は、他者の話を聞きながら自己内対話を繰り返し、ファシリテーターの思考を深める問いに支えられ、他の参加者と語りのキャッチボールを続けることでより深い視点について思考を進めている。この研究成果は2018年6月 OMEP 世界幼児教育・保育機構世界大会と2019年5月日本保育学会にてポスター発表を行い、2019年9月の OMEP APR アジア・太平洋地域大会でも発表を予定している。

<参考文献> 1) 河野哲也 武蔵野大学教育学部児童教育学科におけるレクチャー資料 2017.8.3